マイトリパの僧院追放とアティシャ

静　春樹

0. 本稿の構成

本稿が取りあげるマイトリパ（以下、Maitri-pa）は、別名アドヴァヤヴァジラ（Advayavajra）としても知られ、現行のチベット大蔵経に多くの著作を残す金剛乗の学匠である。Maitri-pa の事績についての重要な論考が羽田野［1987(1958): 166~181］である。その後、アメリカの学者 Mark Tatz は The Life of the Śiddha-Philosopher Maitrīgupta［1987: 695~711］（以下、第一論文）でネパール写本『アドヴァヤヴァジラ伝』（Amanasikāre Yathāśurtakrama）（奥山［1991: 463~485］）を中心にしてこの人物を論じた。つづく Maitrī-pa and Atiśa［1988: 473~481］（以下、第二論文）では、それと関連するチベット人の歴史書を取りあげて、アティシャ（982~1054）による Maitri-pa の追放物語を全面的に検討している。二つの Tatz 論文はチベット人の手になる歴史書の性格、資料としての信憑性を鋭く剔った問題提起でもある。本稿では、まず、論題にも出るアティシャに焦点を当てて、筆者がインド金剛乗の姿を追求したこれまでの論文二本の概要を述べることで本論への導入としたい。つぎに、チベット人の手になる Maitri-pa に言及した資料をいくつか出す。つづいて、Tatz 論文の要点を抽出する。以上に基づいて Maitri-pa 追放事件についての筆者の考察を述べる。

1. これまでの経過

インド仏教金剛乗、正確にはタントラの無上瑜伽階梯にまで展開した金剛乗は、瑜伽階梯までの阿闍梨灌頂を一階部分とすれば、その上に二階部分としての第二秘密灌頂・第三般若智灌頂、さらに三階部分としての第四灌頂からなる四灌頂体系を構築した。四灌頂を円満して持金剛者となり、後に具足戒も受けてヴィクラマシーラ大僧院の上座となったアティシャは「金剛乗の比丘」と呼ばれるに相応しい人物である。筆者はこれまで、アティシャを主題にした論考「金剛乗の比丘アティシャと秘密・般若智灌頂禁止の問題」[1]（以下、「灌頂禁止の問題」と略）と「アティシャと金剛乗の行」[2] を発表してきた。

「灌頂禁止の問題」では、まず四灌頂全体を円満する場合に不可避な性瑜伽の実践である秘密灌頂と般若智灌頂が比丘の律儀である別解脱戒が定める波羅夷罪（*pārājika*）を惹起する問題を強引な論法でねじ伏せて、「比丘を持金剛者と作すべし」（bhikṣuṃ vajradharṃ kuryāt）との主張を展開したヴァーギーシュヴァラキールティ（Vāgīśvarakīrti, 活躍年代 , 十一世紀初頭）に注意を向けた。この人物はチベット人歴史家が述べるヴィクラマシーラ僧院の六賢門のひとりとされる人物である。この主張を筆者は「ヴァーギーシュヴァラ準則」と名づけた。彼につづいて、文献で明らかなところではアバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta, 1064~1125）、ラトナラクシタ（Ratnarakṣita, 活躍年代 , 十二世紀後半〜十三世紀初頭）が「ヴァーギーシュヴァラ準則」を唱道している。持金剛者というアイデンティティ（自己確証、自己帰属）を共通とすることで、僧院に止住する比丘と在俗の瑜伽行者（*yogin*）が一つの世界を作ることができるのであり、まさしく、この準則が組織原則となって金剛乗が成立していると理解される。さらに金剛乗を信解する比丘たちにとっては、律蔵の規定どおりの「僧伽の七衆」の最上位であることに加えて、この持金剛者であることで、在俗瑜伽行者を抑え

て金剛乗の世界の主導権を握りうることを意味している。具体的には、諸の世間儀礼（護摩・善住式・葬送 etc.）および出世間儀礼（灌頂・ガナチャクラ etc.）の金剛阿闍梨となることで施主の財物、動産・不動産の寄進を享受できることになる。このことは、諸の典籍において、「比丘である持金剛者の優位」の主張がもち出されていることから導き出される結論である。その場合は、僧院に象徴される既成仏教を軽蔑し、僧院の権威を離れた地点で宗教家として己の道をゆく瑜伽行者たちであっても、伝統的な「僧伽の七衆」論からする限り、優婆塞のカテゴリーに配属されたままで、有無を言う余地なく比丘の下位に甘んじるしか道はないからである。これは、金剛乗がとくに強調する「グル崇拝」を巡って、比丘が在俗瑜伽行者を師匠として頂礼することの是非の問題として先鋭化する[3]。

「ヴァーギーシュヴァラ準則」が、*Saṃkṣiptābhiṣekavidhi*（Toh 1887）において定式化される以前から、持金剛者であるとのアイデンティティをもつ多くの比丘たちが活動していたことは、ターラナータの『インド仏教史』（以下、『Tāranātha 仏教史』）が述べる六賢門以前のヴィクラマシーラ僧院の「真言阿闍梨」たちの系譜から了解される[4]。

引きつづき「灌頂禁止の問題」は、アティシャ作『菩提道灯』（Toh 3947）、『菩提道灯細疏』（Toh 3948）が主張する第二秘密灌頂・第三秘密智灌頂禁止の問題を取りあげた。そこで、これまで誰もが注目しなかったこと、つまりアティシャの論点（禁止勧告）は論理的に正しい矛盾概念として提起されておらず、結果として、彼は「準則」が出す金剛乗の死活問題となる組織原則の問題から身を逸らしていることを明らかにした。同時に、そうした経緯にもかかわらず、その擬似的二項対立からなる彼の主張が彼をチベットに迎えた持律者たちを安堵したことで、チベット仏教の進路決定に限りない影響を与えたと結論した。

「アティシャと金剛乗の行」では、行の概観と関連させて、アティシャが保持した金剛乗の行の諸相について論じた。ガナチャクラ（以下、聚輪）を始めとする諸儀礼は、若くして在俗瑜伽行者の道統に入った彼にとっては身近で具体的な実践作法であり、金剛乗にとって枢要となるこれら行の諸儀軌も彼にとっては波羅蜜乗の論書に劣らず貴重なものであったはずである。しかし、「灌頂禁止の問題」でも取り上げたように、この金剛乗の精髄とも言える行の諸相を受容することからおよそ遠く離れた精神性・気質をもつ人物が、アティシャの後継者ドムトゥンパ（Brom ston pa rGyal ba’i ’byung gnas, 1005 〜 1064）であった。その彼が、自身が言うところの「卑猥で下品な」諸儀軌をアティシャから伝授されていることは歴史の皮肉とも言えるものであろう。アティシャがドムトゥンパだけに授けることになったと述べられている「秘密真言の行の方便」の内容は以下のとおりである。

> Phyin phu の地で Devarāja と Nāgarāja と mGar dge ba と訳経師（ナクツォ）との四人が〔アティシャに〕大バラモン（サラハ , Saraha）の教誡（*doha*）を請問したのでドムが諫止した。その時に〔アティシャは〕灌頂儀軌と善住式儀軌と護摩儀軌と聚輪儀軌（tshogs ’khor gi cho ga, *gaṇacakravidhi*）と勇者の饗宴（dpa’ bo’i ston mo, *vīrabhojya*）〔儀軌〕と凡夫の饗宴（byis pa’i ston mo）〔儀軌〕と普賢行（kun tu bzang po’i spyod pa, *samantabhadracaryā*）の方便と征服の行（phyogs las rnam rgyal ba’i spyod pa, *digvijayacaryā*）の方便と大カパーラの行（thod pa chen po’i spyod pa, **mahākāpālikacaryā*）の方便とアヴァドゥーティパの行（*avadhūticaryā*）の方便と瘋狂の誓戒（smyon pa’i brtul zhugs, *unmattavrata*）とブスク

の誓戒（*busukuvrata*）とさらに真言の教誡の多くをドムトゥンパにお授けになったのである[5]。

筆者は、ナーランダー僧院およびパーラ王朝の代々の王たちによって建立され、彼らの篤い庇護を受けた大僧院（オーダンタプリー・ヴィクラマシーラ・ソーマプリー・ジャガッダラ等）が金剛乗の一方の牙城であったと考える。これらの僧院を離れて金剛乗は存在し得なかったことであろう。しかし、同時に金剛乗は大僧院内部に限定される存在でもなかった。僧院とは何らかの繋がりをもちながらも、僧院の境内を越えた在俗瑜伽行者のアモルフな活動空間をもう一つの根拠地と考える。僧院に止住する比丘と在俗瑜伽行者との双方の極が反撥したり、協調したりしながら結果として金剛乗の世界を構成していたことを明らかにしたいのである。この両極に収斂される二つの纏まりも、それぞれその内部を詳しく眺めるならば、思想信条と活動様式の相違と多様な人間関係の一端が見られることを本稿で示したいと考えている。

本稿が基づいている『アティシャ伝』は、仏教改革を悲願とした西チベットのグゲ王家から知名度の高いインドのパンディタを招請する大役を仰せつかい、アティシャに都合十九年間も師事したナクツォ訳経師（Nag tsho Tshul khrims rgyal ba, 1011~1064）からの直接の情報に基づいて編纂された極めて重要な伝記である。ナクツォは二回のインド行きを含む生涯において多くの重要なインド人の学匠・瑜伽行者に出会っている。彼はアティシャ招請の準備期間中にプラハリ（Phullahari）へ有名人ナーローパ（Nāropa, 956~1040）見物に行って実際の姿を瞥見している[6]。Maitrai-pa の高弟でチベットへ巡錫したヴァジラパーニ（Vajrapāṇi）とも翻訳で協業している[7]。何よりも彼は、ヴィクラマシーラ大僧院に滞在して生きた僧団のあり方を経験し、在俗瑜伽行者と比丘の双方のあり方を体験した師匠の傍らで長年月を過ごした人物である。『アティシャ伝』の成立の経緯については羽田野伯猷がすでに詳細な研究を出している。本稿も羽田野の先駆的な研究に多くを負うものである。

2. チベット人の歴史書よりの引用

『アティシャ伝』

1) gSer gling（スマトラ島）の Dharmakīrti は大慈の故に Maitri-pa とも言われた。三人の Maitri-pa が出現したことについては、〔第一に〕王子 Maitri-pa は弥勒尊で、〔つぎに〕王者 Maitri-pa はアティシャによってヴィクラマ〔シーラ僧院〕から追放されたお方である。〔もうひとりが〕この〔論じている〕gSer gling pa の Maitri〔pa〕と呼ばれるお方であると言われる[8]。

2) 得成就の三人のグルがおられて、〔アティシャは〕小 Kusulu とヤマーンタカの瑜伽行者と Avadhūti-pa の三人の法を照見された。（略）Kamalarakṣita という名のヤマーンタカの瑜伽者は酒を乳に転換させた。ヤマーンタカの瑜伽者が酒を飲んだことで、「追放されて〔僧院の〕門から出ていくことは考えられない」と言って、壁から難なく（通り抜けて）立ち去って、河に敷物を拡げて去った。（略）ガンジス河に敷物を拡げてから〔それに座って〕立ち去ることができたそのグルから〔アティシャは〕真言〔理趣〕の多く

の利益を受けた[9]。

3) とくに、王者 Maitri-pa と呼ばれるお方がそこ（ヴィクラマシーラ僧院）に住しておられたが、彼の見と行と果の三つについて、上師ラトナーカラシャーンティ（Śānti-pa）が過失を指摘して門の棟に書いたのである。Maitri-pa も『〔悪〕見除滅』(Kudṛṣṭinirghāta)[10] と、『夢説開示』(Svapnanirdeśa)[11] と、『幻説示』(Māyānirukti)[12]〔等と名づける〕論典を著して〔Śānti-pa の〕過失を払拭したと言われる。その Maitri-pa は、瑜伽女に誓言をなして、瑜伽女の聖物である酒を隠しもっていたのを一人の大徳が見つけて僧伽に告げた。僧伽の僧たちは、「違犯者がいれば追放せねばならない」と言った。〔Maitri-pa は〕「追放して退去を命じなくても、それが私を損なうことはない」と言ったので、「汝を損なわなくても他の者を損なう」と言って追放した。〔そこで Maitri-pa は〕「違犯者が正門を出ていくのは相応しくない」と言って、外壁を通り抜けて立ち去ったのである[13]。

4）アティシャは胸中で、「〔Maitri-pa の追放は〕良かったのか良くなかったのか」と考えたので、その夜にターラー尊に供物を捧げ、讃嘆をなして〔その是非を〕請問したので、アティシャが僧坊で少しばかり眠った夢うつつに、「息子よ、良くないことである」という声が三度聞こえた。外へ出て見たが何も見えなかった。また内に戻って〔ターラー〕尊に請問したので、ターラー女尊が「安楽を享受する比丘の中で発菩提した一人の菩薩こそが王者 Maitri-pa である。菩薩に対して罪を造るならば、異熟は極めて大きい」と仰った。アティシャは「それ（罪過）についての異熟はどのように生じるのですか」と質問したので、〔ターラー尊は〕「須弥山を三周する大きな有情に生まれてから、様々な鳥たちの餌にされる」と仰った。〔アティシャが〕「それならば、それ〔を修復する〕には何が役立ちますか」と尋ねたので、〔ターラー尊は〕「北方に赴いて大乗の法を流布させるならば、〔それが罪過の修復に〕役立つ。〔また〕毎日、甎塔（*sañca*）を七個づつ建立すれば役立つ」と仰った。その意味については、チベットに巡錫させる考えであると仰った[14]。

『青冊史』

Maitri-pa は、最初は外と内のほとんどの宗義に通暁したが、彼は心底では満足できなくて、懸命の努力で吉祥なる Śabareśvara を探索した。そのお方に加持されて、お言葉で覚醒したことで〔Maitri-pa は〕、精髄の義を現前に證得してから、「不憶念」(*Asmṛti) と不作意（Amanasikāra）などの理趣を語られたので、大学者 Śānti-pa は〔その教説を〕喜ばず、論争となって Maitri-pa が勝利した。まさにその後、〔彼は〕勝利者（Jina）Maitri-pa として知られることとなった[15]。

『マルパ伝』

尊主マルパが旅をして上 Nyang に行ったので、Bzhengs の gLang po sna でチベットに到着したアティシャと出会った。以前に Nāro-pa の下でナーランダーの監督僧（chos khrims）をなさった柔和で温厚なクシャトリヤの学匠がそのお方であると〔マルパには〕分かっていた[16]。〔アティシャが〕王者 Maitri-pa が〔三昧耶の〕聖物に依止したことを

許容なさらず少しばかり非難されたのは適切であった。僧伽の別解脱戒は一般的規律であるが故に、彼自身（アティシャ）に我欲はなく、〔アティシャは〕柔和で温厚であって、チベットに仏法を布教に来られたので〔マルパは〕心に喜びと尊い印象が生じた[17]。

『学者の宴』

アティシャが恣に行動した一部の者たちを住処（僧院）からも追放した。とくにパンディタ Maitri が瑜伽女の聖物である酒を運ぶのを他の者に見られて、「これは汝を損なわないとしても、他の者を損なうので立ち去るよう求める」と言って追放されたので、〔Maitri-pa は〕違犯者が門から出て行くことはできないと言って、壁から障礙なく〔通り抜けて〕立ち去った。アティシャは良かったのか、良くなかったのかと考えて、ターラー尊に請問したので、「息子よ、良くなかった」という声が三返生じた。〔アティシャが〕見たので、ターラー尊が「Maitri-pa は発心した菩薩である。菩薩に対する過失の積集は異熟が極めて大きいのであって、須弥山を三周するほどの大きな生物に生まれて様々な鳥たちの餌となるであろう。チベットへ行って大乗を流布せよ。〔また〕毎日、七体ずつ甎塔を建立すれば〔悪〕業は浄化する」と仰った[18]。

『学者の宴』カギュ派の章

Maitri-pa は Madhyadeśa（中天竺）でバラモン種姓に生まれた。（略）文法を習得し終えて、Nāro-pa と論争して Nāro-pa が勝ち〔彼に〕師事した。バラモンの禁戒と学処と言われるものを究竟して Śānti-pa から受戒した。御名は Maitri で慈愛〔なる者〕として知られた。五明に通暁し比肩する者がなくなった。ヴィクラマラシーラ〔僧院〕に住していたとき、守護尊である〔ヴァジラ〕ヨーギニーの内の聖物に依止するのを尊者アティシャなどの執事僧（zhal ta pa）に見られて僧伽によって住居から追放されたので、〔Maitri-pa は〕違犯者が門を出るのは適切ではないと壁を通り抜けて立ち去った。前方にガンジス河があるので、敷物を拡げた。召使い Gusakara の手を掴んで、「行ってしまうので太陽は沈んだ」と僧伽の全員が言った時に、アティシャが〔Maitri-pa が乗った〕舟に回り込んで追いすがり〔翻意するよう〕懇願したので、〔Maitri-pa は〕「現在ではひとつの僧院の壁内のパンディタは相互に摂受できないが、私は優れた一人の上師と出会った夢を見たので、〔そのお方と〕出会えるならば摂受されよう。私の僧坊にターラーの尊像がひとつあり、それを〔汝の〕守護尊となせ」と〔アティシャに〕仰った[19]（以下に続く Śabari-pa 探索の旅は省略）。

（Śabari-pa から不作意の教誡を得て、Maitri-pa は）睡眠から目覚めた時に一切の法を忘れていたので、自死しようと思った時に虚空に〔Śabari-pa が〕実際に現れて、「不生の諸法について知ることがどこにあろうか。不滅の諸法について忘れることがどこにあろうか」などを仰って、汝は Madhyadeśa に行け。私の身代わりとして阿闍梨となれ。器をもつ者を摂受せよ」と仰った。〔Maitri-pa は〕そのようになされて、獅子吼によって外道の Natikara を教化した。Śānti-pa も論争の文を作って逃げ出した。他の誰もが論争できなくて〔Maitri-pa は〕金剛座の供養阿闍梨をなされた。マガダの王が篤く帰依して大王者 Maiti-pa という名前でお呼びになった。〔Maitri-pa は〕Me ’bar 山の祠堂に住して

不作意の法輪（論典）をお作りになった[20]。

Padma dkar po

大阿闍梨 Maitri-pa の年代記は、paṇḍita-Jinadeva, Spyod ’tshang mgon po, ’Bar ba’i gtso bo として知られたお方が、その生で遷化して、長い時を経て、Madhyadeśa の都城 Grabila でバラモン種姓に生まれた。お名前は Dharma〔であった〕。生まれつき般若に秀でて外道の文法の学校に住して pāṇivyākaraṇa を〔修学し〕、つぎに九年の長きにわたり外道の宗義を余すところなく学んだ。それらの中で学者たちが畏れること大であった。お名前は「三杖」（dbyug ga gsum, **tridaṇḍa*）と名づけられた。彼の叔母が Nāro-pa の印契女だったので、その者が、「外道の法は今生か天界が成就できるけれども、輪廻から超出しないから仏にはなれない。だから、吉祥なる Nāro-pa に法を聴聞しなさい。そのお方と論争して敗北した方が改宗するのが道理である」と言った。そこへ連れて行かれて、Nāro-pa と教義を賭けにして論争して Nāro-pa が勝ち、〔Maitri-pa は〕外道の標幟を投げ捨てて出家した。Dharmabodhi と名づけられサンヴァラとヘーヴァジラなどの灌頂〔を受け〕、秘密の名号は Vajrarāga であった。波羅蜜部とタントラ部を多く学んだ。〔Nāro-pa が〕「今は汝は印契女一人に依止して阿蘭若で修習せよ」と仰ったので、〔Maitri-pa は〕「私は印契女を欲しません。阿蘭若で修習しません。優れた聴聞がしたいのです」と懇願して、Ratnākaraśānti-pa の阿闍梨 Tritacintamaṇi に就いた。そのお方の下で唯識を一年間聴聞した。つぎに Kopika 地方で Śānti-pa と出会い親近し終えた。御名は Maitrigupta と名づけられて三蔵を修治した。彼の下で Maitri-pa は〔一切法〕不住〔中観〕説を執持した。Śānti-pa が形相虚偽論を執持して論争した。Maitri–pa の良い理証のせいで阿闍梨が怒りから法衣を脱ぎ〔僧院の〕門から投げ捨てた。〔Maitri–pa は〕門の傍にある塵の堆積から糞掃衣の端切れがあるのを拾って、そこから遠くないところにある mNgon par dga’ ba のターラー尊廟でターラーに懇願して七日間住した。明け方の夢に十六歳ほどの美しい娘が現れて、「Avadhūti-pa よ、汝はここには居らずに〔立ち去るべし〕。東方にある ’Gron bu zad pa の僧院に世自在が住しておられる。〔そこで〕そのお方に授記されるであろう」と仰って姿が消えた。目覚めてから、Khasarpaṇi に赴いて、大悲者（世自在）に懇願しながら住して、一年が経った明け方に浅い眠りから覚めた夢に白い頑丈な一人の男が現れて、「Avadhūti-pa よ、汝はここに居らずに南方に行け。ここから半月と五日の地に śrī-Parvata と Manobhaṅga と Cittaśrāma と呼ばれる山で瑜伽の自在者 Śabari 夫婦が住している。そこへ行けば未證得と悪見と疑念の一切が切断されるであろう」と仰った。そこで〔Maitri-pa は〕Avadhūti-pa という御名で呼ばれた[21]。（以下、Śabari 探索の精神的な旅は省略）

（Śabari が）汝は私に対して疑念を抱いてしまったので今生で最勝の悉地は得られない。死に臨んでヴァジラヨーギニーと出会って中有で最勝悉地〔が獲得されること〕となろう」と授記して姿が見えなくなったのである。そこで〔Maitri-pa は〕道に臥して眠ってしまった。睡眠から覚めてから、Śabari に請問した諸法について分別したことですべてを忘れてしまった。今は動顛し、あり得ないことだ、自死しようかと思った。〔そこへ〕Śabari が目の前に現れて、「Maitri-pa よ、何か悪いことがあるのか」と仰った。

〔Maitri-pa は〕「私は一切の法を忘れてしまったので自死しようと思います」と申し上げた。〔Śabari は〕「Advayavajra よ、Āvadhūti よ、不生の諸法を忘れることなどどこにあろうか。不滅の諸法を忘れることなどどこにあろうか。三界はもともと解放されており、無明によって成就している。チャクラサンヴァラの最勝楽が不生の自性そのものである」と仰って、Maitri-pa に證得が出現し、初地の智慧を障礙なく観察したのである。〔Maitri-pa は〕三つの山の阿闍梨と印契女たちによってなされたすべてを心髄義説示の徴として把握し、上師に證得を献じ、「一切諸法は空性で、空性と悲の二つは不二の阿闍梨である。寂静の義を観察すれば如何になすとも解脱するであろう。無所縁と人為的でないことと憶念の塵さえもないとの義を私は證得した。今は誰にも質問すべきではない」と仰った。御名は Advayavajra と呼ばれて、Madhyadeśa にやって来られたのである。
その時、すべての者が「Maitri-pa は Śabari と会ったのだ」と言った結果、大いなる名声が生じた。不信者たちが Śabari とは出会わずに魔によって加持されたのである」と言明した。その時、外道の教師 Matraṅ-sena という外道の理論家で二千人の眷属を伴った者が、「彼が Śabari に出会ったのならば私は勝てない。出会っていなければ彼は私に勝てないので、論争すれば分かる」と言った。Muñja 王が論議の囲いに座を用意した。〔王は〕Śānti-pa などの仏教徒と外教徒を自分が勝敗〔を判定するため〕の証人に指名した。王がすべての道に灌水した。戦車の上に〔二人を〕招請して、どちらであれ勝者の膝下に入るようにと言ってから、Maitri-pa が問者となり、Matraṅ-sena が対論者となった。〔Maitri-pa は〕見は、〔一切法〕不住論（Sarvadharmāpratiṣṭhā）、修習は不作意（Amanasikāra）などの誓言をなして理証を開陳した。教証によって根拠を示したので論敵は対抗できず、大 Maitri-pa が勝ったので勝者（jina）として知れ渡った。論敵は眷属を伴って出家した [22]。

それから、阿闍梨 Śānti-pa が彼に対する過失を書いて金剛座の節会の時に門の棟に結びつけたのである。それを Maitri-pa はご覧にならなかった。彼のことを人々は、「Śānti-pa に向かって Maitri-pa は論争できない」と言った。翌日、Maitri-pa は Śānti-pa に対して、「昨日は文言を私は見ていません。今日は何としても〔論議を〕始めましょう」と要求したので、Śānti-pa は現れなかった。伝言を十三回も繰り返し送ったけれども〔Śānti-pa は〕現れずに逃走した。ある時に節会の上首を彼がなされたことに対して、そこで王が Maitri-pa に与えた御名は「王者」であり、至る所で王者・勝者 Maitri-pa として知れ渡ったのである。その時に、僧伽の共同体はオータンタプリ、吉祥ナーランダー、金剛座、ヴィクラマシーラの四つが最勝であり、〔Maitri-pa は〕Phyi ma'i 'byung ba と言われる僧院に住し、講釈と聴聞をなされた。論書をたくさん著された [23]。

つぎに、長い時が経って、〔Maitri-pa が〕三昧耶の聖物として酒を買ったので、監督僧（dge skos *upadhivārika）であった Dīpaṃkara〔śrījñāna〕（アティシャ）に見られた。〔アティシャは〕共同体〔の規律〕への違犯の畏れから王に報告した。（略）〔パンディタたちは〕Maitri-pa の前に行って、「汝が酒を飲んだので罰を実行しろ」〔と迫った。Maitri-pa は〕「私は飲んでいない。汝らが飲んだのである」〔と言った〕。そこで〔王は〕吐き出せば分か

ると考え、吐き出させた。Maitri-pa はヘーヴァジラの口伝を実行したので彼らに酒を吐かせ、彼自身は乳を吐いた。そこで Maitri-pa は喜ばず僧伽の中央から壁から障礙なく〔抜け〕出た。ガンジス河で羚羊の毛皮を拡げて去ったのである。対岸で全員が「留まり給え」と懇願したが、堪忍を受け入れて留まることを〔自らに〕許されなかった[24]。

〔Maitri-pa は〕インド東方の Me ltar ’bar ba 山の尸林に道場を建立して住したのである。ある時に、「ヴァジラパーニよ、汝は行って近在の弟子たちを集めよ」と仰ったので、〔彼はそのように弟子たちを〕集めた。そこで広大な供物と聚輪を準備して、弟子たちに加持の本尊を各自に授けた。遺訓を言葉で仰った。眷属たちが、「〔もっと〕長く〔この世に〕住し給え」と懇願したので〔暫く〕留まられけれども、〔Maitri-pa は〕「悉地成就の時に業（*karman*）を損なうだろうから〔これ以上この世に留まることは〕適切ではない」と仰って、ヴァジラヨーギニーが歓迎して御年七十五歳で逝去されたのである[25]。

『七教勅』

また、後の時代に生まれた Śabari の弟子は大王者 Maitri-pa であって、〔出家〕名は Maitri-gupta である。そのお方もバラモンの外道のパンディタであって、後に Nāro-pa と出会ってから仏教徒になって灌頂と教誡を懇願した。ナーランダーで出家して Ratnākaraśānti-pa などの学匠で実修者のグル多数に依止して大学者となってから、ヴィクラマシーラ僧院に住した。学者の仕事と〔真言理趣の〕実修を統合して実践しておられたことから、ヴァジラヨーギニーのお顔を拝された。〔そこで〕三摩地の助伴にする時であるとご理解されてから内の普行を秘密裡に行じたことから、ある沙弥に阿闍梨が女性と一緒に酒を飲んでいるのを見られて、僧伽で争論が生じた。そこで阿闍梨が乳を吐き出した。その沙弥自身に酒を吐く所作をされたので〔その沙弥は〕酒を吐き出した。〔その結果 Maitri-pa に〕何の〔咎めの〕言葉もなかった。またある時に、監督僧（dge bskos）などが知って追求しにやって来たときに、酒は乳に転換され、女性は見えなくされるか鈴に変えたと言われることもある。さらに後のある時、〔追求者たちが〕密かに忍び寄って来たので、マントラで転換して誤魔化すことができず、僧伽が〔彼を〕追放した。〔Maitri-pa は〕ガンジス河に毛皮を拡げてから〔河を渡って〕去った。その時の監督僧は尊者アティシャであったと言う。その〔Maitri-pa 追放に関与したことで生じた〕障礙を修治する上で、〔アティシャは〕尊者本人（Maitri-pa）に法を聴聞し、チベットへ来たとも言われる。壊れない甎塔を作ったとも言われる[26]。

〔Maitri-pa は〕自身に威力は無量を得たけれども、真実が少しばかり未證得であり、守護尊の授記が生じて、śrī-Parvata での Śabari を探索するために去られた。南方面への道で Sakara 王子と出会った。その者と一緒に śrī-Parvata へ出かけた。その近在の人々が、「Śabari-pa は昔の成就者である。現在どこで〔出会う機会など〕得られようか」と言ったけれども、〔心〕一境に懇願したので六ヶ月で出会えたのである。頭の髷は解けて虱の卵がバラバラと落ちている Śabari-pa が現れて、〔それを〕二人の妻が食べていたので、Maitri-pa は少しばかり心に不信〔を抱いた〕。〔王子は〕御足に頂礼したので、〔Śabari-pa

は〕、「A ya ja ra va la hu」と仰ったので、〔王子は〕真実に解脱し虹身となったので〔Maitri-pa の〕心に信が生じた。また二人の妻が豚と鹿と孔雀を殺すのを見たので少しばかり不信〔を抱いた〕、〔Śabari-pa が〕弾指をしたので、彼には姿が見えなくなった。しかしながら、〔Maitri-pa は〕灌頂を受け、教誡と付随する教誡によって本義の伺察の智慧が生じ、無数の勇者とダーキニーの上首となった。今は剣などの八悉地を成就して一劫に住する持明者（*vidyādhara*）になろうと考えて聖物を集めて成就の予兆が生じた時に、Śabari-pa が期剋印をなしたので〔すべては〕壊滅してしまった。〔Śabari-pa は〕、「さて、汝はその幻で何をするつもりか。根本義を広大に釈説せよ」と仰った。〔そのとおりに Maitri-pa は〕再び Madhyadeśa に帰還されたのである [27]。

チベット人たちがその後で Śānti-pa と論争したなどという伝記を物語るのは意味として道理に合わないと見られる。インドではそのような口頭伝承すらないと言われていて、チベットでそのように知られていると報告されている。（略）従って、それはチベットの愚者たちが虚偽を撚り合わせて編集したものだと知るべきである。この阿闍梨が Madhyadeśa で不作意〔の教説〕を説かれて、ある不信心者に対して、典籍の根拠である Grub snying gi skor を広大にお説きになった。「タントラの密意ではない」と言われたので、『ヘーヴァジラ』と『〔秘密〕集会』を根幹とした教証によって論証された。「誰から得たのか」との質問には、『灌頂決定説示』（śekanirdeśa）[28] を著されて、〔それは〕Śabari-pa の口伝を実修して説いたものであるとチベット人たちは言う。尸林 Śītavana で入街（grong ’jug）の理趣を多く示された。〔Maitri-pa が〕願った通りのすべてをマハーカーラが実行して、何百由旬も離れた外から動くものと動かないものを虚空から運んできた。虚空から連れてきた Malaba 王の娘は後にダーキニーの Gaṅgādharā として知られた。〔そのお方は〕大部分は東方の Kusala の森の主として住したのである。〔この〕ダーキニーはジャッカルに化作してトルマを取り、看法を成就し、様々な形姿に化作することなどが稀有にして無量であられた。以前に Śabari-pa に対して二つの不信〔を抱いた因縁〕から、〔Maitri-pa は〕御身を〔現世に化身として〕留めることができなかった。御年七十ほどで逝去され中有で最勝の大印契が成就したのである [29]。（略）

dPag bSam lJon bzang

その時に、あるバラモンのパンディタ（Maitri-pa）が Nāro-pa と出会ってから仏教に帰依して出家し、Ratnākaraśānti などに依止して学匠となった。ヴィクラマシーラ〔僧院〕でスートラ（波羅蜜理趣）と真言〔理趣〕を統一して実修なさった機会に、酒を乳に転換してから飲んだ。〔しかし〕尊主（アティシャ）が監督僧であった時に〔僧院から〕追放され、〔その際〕ガンジス河で毛皮〔を拡げた〕上〔に載って〕から〔対岸へ〕渡るなど多くの成就の徴を示された [30]。

3. Mark Tatz 論文の要点（丸括弧内の文言は訳者の説明文）

1) 第一論文からの引用

タントリズムは最終的には仏教哲理に吸収された。「三律儀」の分野の典籍は、僧伽の規律と菩薩の利他の倫理とタントラの三昧耶を会通しょうと試みる。哲学者たちの内に

は、宗教生活では論理学に副次的な役割しか割り当てない者もいた。しかし、この事態が起こる前に幾人もの学者たちは、精神的向上を希求するために僧院生活を離れる必要性に遭遇した。Nāro-pa の物語はその驚嘆すべき一例である。他には、彼の同時代人である Maitrīgupta の物語がある。(p.695)

この事例での成就者の同定問題よりさらに深刻な歴史学的問題が宗派的偏向である。資料のほとんどはチベット人の手になるものである。チベット人宗教史家にとっての「歴史」とは、聖典についての手引き書となるものである。従って、彼らが提出するデータの大部分は典籍からの推論と当該人物に帰せられる実践の諸から構成される。(略) Maitrīgupta のような十一世紀以降の人物たちは、さらにチベットで展開したいずれかの宗派と関係していた。それらの宗派は、インドに由来する阿蘭若 vs 学問〔僧院〕の対立という衝突の各側面を代表している。〔チベット人〕歴史家の諸資料は、問題となる時代から由来する口頭伝承であるが、そこには伝説上の誇張と過小評価がはびこっている。(p.696)

チベット人のすべての歴史書において、〔Maitri-pa の僧院生活の〕放棄は、アティシャまたはラトナーカラシャーンティによる追放話で曇らされている。吟味の結果、これらの報告に史実的な価値はほとんど示されていない。それらの報告はアティシャの伝記が「元ネタ」であり、宗派的な意図によって、とくに、アカデミックな僧院はおよそ精神的成就のための環境には適さないであろうという初期カギュ派の見解に対する反感によって鼓舞された結果の産物と思われる。(p.700)

2) 第二論文からの引用

Maitrī-pa についてのチベット人による目立った記述は、彼がアティシャによってヴィクラマシーラ僧院からどのように追放されたかの物語である。その物語はチベット以外の資料には決して現れない。(p.473L1-3)

チベット人歴史家たちが明らかに宗派的土俵に立ってそれらの物語を用いていることは、後期インド仏教に関係した場合のチベット人歴史家の伝承の妥当性に疑問を挟むものである。どちらの意図的な出来事（Maitri-pa の僧院追放とアティシャが Maitri-pa から『宝性論』の教示を受けたこと）もどちらの人物の精神的経歴にとって中心となるものではなく、そして筆者は Maitrī-pa についての近年の聖者伝の研究からそれら〔の物語〕を除外するために、ここでその研究を提出するのである。(p.473L6-9)

Maitrī-pa はアティシャの同時代人であり、羽田野が出す ca 986~1063 の生没年は、本稿の論究にとっては大過ないであろう。彼らは同時代に生存していた。その時期における僧院からの追放の報告が、チベットの歴史書に執拗なまでに現れることから、人は少なくともそのような何らかの出来事が実際に生じたに相違ないと信じるはずである。おそらく Maitrī-pa 追放物語にとっての最古の資料は「アティシャ伝」であり、その最初のものは 1150 年に遡るであろう。(pp.473L27-474L4)

この物語のモティーフは以下のように仕分けられよう。
1.〔Maitri-pa の〕酒と女性〔に関与〕の罪
2. 誰かによる〔Maitri-pa への〕スパイ行為
3.〔僧団によって〕表明された正当化による追放（汝自身の行為に害はなくても、したことは他者への悪例となる）
4. Maitri-pa 自身の神通による非行の正当化
5. 尊格による〔Maitri-pa の〕非行の正当化
同じ物語から女性を除いたものに相当すると見られるものを伝記は Kamalarakṣita について語る（Eimer n.110, 24a2f）。二つの自己正当化が付加される。4a. 彼は酒を乳に転換し、4b. 彼は敷物で河を渡る。（pp.474L27-475L3）

全体として、この物語は僧院共同体の通常生活とタントラ実践の特異な方途との間の衝突を劇化している。僧団の長老たちは、「汝を損なうことはないだろうが、他の者たちを損なうだろう」と言う時に「他の方途」（タントラの実践）の適法性を承認している。追放に対するこの脆弱な正当化は非法者の悉地の顕示による壁の通り抜けと毛皮に載ってのガンジスの渡河、さらには尊格による〔非行者の〕品行方正の証明によっても覆される。それが、物語の全体として、僧団の決定が僧院の規律で正当化されているであろう事実にもかかわらず、その〔追放という〕行為を〔アティシャが〕後悔している理由である。
こうした諸問題に注目する必要がある。そのような衝突がインドで起こったかどうか、もしそうだとして、追放者と被追放者として関与したのは誰なのかである。
この衝突が大規模と言えるまでにインドで演じられたとしてチベット人の諸資料が極端に劇化しているのは、〔この衝突が〕同時代のチベットでそれ程にも重要であったからではないのかと疑ってかかる理由がある。〔その理由は以下である。そもそも〕アティシャは性交と殺害を含むタントラ儀礼のせいで堕落したと言われる仏教を改革する目的でチベットに招請された。チベット王 Byang chub ’od のために書かれた彼の『菩提道灯』中でアティシャは非梵行を要請する諸実践は比丘のためのものではないと説いている。〔ところが〕インド王 Nayapāla に当てた書簡（Cattopadhyaya, pp.520-524）には、そのような改革の関心は示されていない。『道灯』中でさえアティシャは筋を通していない。それに続く行の文言と結末は、「真実を知る者にとっては〔何をなそうとも〕違犯はない」と〔まで〕言明する。（ed.654, tr.177）。そして、伝記は、タントラがインドにおける彼自身の中心であったことを明らかにする。さらにアティシャは、弟子たちが彼に許容しょうとする以上をチベットで教えたと主張する資料がある。（pp.475L38-476L13）

「Maitri-pa 追放」物語によって、伝記と後世の史家たちは自分たちの時代に生じた経済的・政治的権力をめぐる僧院の諸機関同士の競合をインド仏教に投影している。一人の王をそのドラマに導き入れる物語は、この過程をさらに進めたものである。（p.476L21-25）

アティシャの伝記作者たちは、Maitri-pa の人生のどの時点でこれ（Śabari-pa の探索）が起きたかを示していない。（そして Maitri-pa の履歴は、アティシャ自身のデータからは

十分な確実性でもって確定されない）。一般的に仮定されることは、強制的な〔僧院との〕別離（追放）が Śabareśvara の探索と精神的な教誡と結び付くことである。（p.477L27-31）

Tatz の第二論文は、生涯を通してタントラの信解者であったアティシャが、タントラの実践をした人物を追放することなどあり得ないと反証すること（『菩提道灯細疏』での「真実を知る者にとって何をしても違犯はない」との言明、ドムトゥンへの「タントラの野卑な行」や「甚深の法」の伝授など）である。さらに、チベット仏教の宗派間の対立が後期インド仏教の僧院内部での出来事をでっち上げる本当の原動力であったと主張することの二点である。Tatz は、「Maitri-pa 追放」自体について被追放者は Maitri-pa ではなく、アティシャの師匠の一人となったヤマーンタカの行者 Kamalarakṣita であった可能性が高いと見ているようである。

4. マイトリパ・シャーンティパ・アティシャの交差点

Maitri-pa 追放事件とアティシャの関与が実際にあったとすれば、その時期はいつであろうか。それには Maitri-pa よりも格段に資料が豊富なアティシャの伝記から、彼がヴィクラマシーラ僧院に住していた時期を調べる必要がある。Cattopadhyaya［1967:96］は、アティシャの受戒からチベットへの旅立ちまでの事績を以下のように纏めている。

1010 年（29 歳）　受戒
　その後、二年間、大毘婆沙論（Mahāvibhāṣa）を聴聞し修学
1012 年（31 歳）　Svarṇadvīpa へ修学に出発
　十二年間、Dharmakīrti の下で波羅蜜乗の教義を修学
1025 年（44 歳）　Madhyadeśa（中天竺）へ帰国
　十五年間、インドで活躍
1040 年（59 歳）　チベットへ出発

つぎに、先に出した各伝記から、śrī-Parvata 山での Śabari-pa 探索の前後関係に焦点を定め、Maitri-pa の事績を時系列的に要約する。

『アティシャ伝』
Maitri-pa ヴィクラマシーラに止住 →Śānti-pa との論争→ Maitri-pa の「非行」→ 大徳に見つかる → 僧院での争論 → 追放 → アティシャの反省 → ターラーの夢告。

『青冊史』
内外の宗義に通暁→ Śabari-pa 探索→「不作意」の教義に不満をもつ Śānti-pa との論争 → Maitri-pa の勝利。

『マルパ伝』（Śabari-pa 探索の記述なし）
Maitri-pa の「非行」→ アティシャの非難。

『学者の宴』カーダム派の章（Śabari-pa 探索の記述なし）
Maitri-pa の非行→追放→アティシャの反省→ターラーの夢告。

『学者の宴』カギュ派の章
Nāro-pa に師事→ Śānti-pa から受戒→ヴィクラマシーラでの「非行」→ アティシャ等に見つかる → 追放 → アティシャが翻意を迫る →Śabari-pa の探索→教誡を得て Madyadeśa へ帰還 → Śānti-pa と論争→自分の道場で「不作意」の教義を宣布。

Padma dkar po
Nāro-pa の弟子となる→ Śānti-pa の弟子となる→見の相違（形象虚偽論唯識説と一切法無住論中観説）に基づく対立→ターラーの夢告で Khasarpaṇi に赴き滞在 →śrī-Parvata と Manobhaṅga と Cittaśrāma と呼ばれる山へ行き Śabari-pa を探索→「不作意」の教説を證得し授記されて Madhyadeśa に帰還→外道の教師 Matraṅ-sena を教化→ Śānti-pa との論争に勝利→アティシャに「非行」を咎められる→王の前での審問と神通による正当化→僧院を去って道場建立→七十五歳で逝去。

Tāranātha『七教勅』
ヴィクラマシーラでの「非行」→ 沙弥に見つかる → 僧団での争論 → 追放 →śrī-Parvata で Śabari-pa を探索→灌頂と教誡を得て Madhyadeśa に帰還→「不作意」の教義を宣説→明妃 Gaṅgādharā を得る → 七十歳位で逝去。

dPag bSam lJon bzang（Śabari-pa 探索の記述なし）
ヴィクラマシーラでの「非行」→ アティシャによって追放 → 弟子養成。

以上から、Śabari-pa 探索の記述がある歴史書の内で、『学者の宴』カギュ派の章と『七教勅』では、ヴィクラマシーラ僧院からの追放の後に Śabari-pa 探索が置かれるのに対して、Padma dkar po ではこの順が逆になる。

ここで、アティシャに十九年間師事したナクツォ訳経師からの直接の聴聞に基づくとの『青冊史』の記述[31]から、羽田野が全幅の信頼を置く『アティシャ伝』を簡単に見る。(1) は、問題の Maitri-pa の名をさりげなくアティシャの生涯の出来事と関係させて述べる文章である。(2) は、アティシャが出家前の在俗瑜伽行者としての修行を積んでいた時代に、教えを受けた人物のひとりに「Kamalarakṣita という名のヤマーンタカの瑜伽行者」がいて、この人物も僧院に止住している際に何らかの「酒の問題」を引き起こし、僧院を追放されたとの話である。(3) は、Maitri-pa の所行とそれに対する僧伽の反応、アティシャの僧院における地位と Maitri-pa 追放への関与が内容である。それに対して (4) は、アティシャの自分がとった行動への疑念から守護尊ターラーとの内的な会話を通した反省・懺悔を彼のチベット巡錫と関係づける物語である。(4) が述べるアティシャの内省の信憑性およびその内容の是非を論じることはもちろんできない。しかしながら (1) ～ (4) が『アティシャ伝』が述べるとおりに Phyag sor pa によるナクツォからの直の伝聞だとすれば、私たちはアティシャの主観的意図に迫る可能性が高い。

それに対して、Tatz が第二論文で行った物語の構造分析によって、「Maitri-pa 追放事件」は限りなく根拠を失い、チベット人が創作した「物語」の地位にまで落とされることになる。しかし他方で、Tatz の期待に反して、Maitri-pa の僧院追放の史実性を否定する歴史書も存在しない。彼が史家として評価するターラナータ（Tāranātha Kun dga' snying po 1575~1635）は Maitri-pa と Śānti-pa の論争の史実性に疑問を投げかけている。その彼も Maitri-pa の僧院追放事件に疑問を差し挟むことはしていない。そこで Tatz は「物語」の歴史性自体を「法螺話」「フィクション」とまでは断定できず、灰色の部分を残したままにしている。厳密なレヴェルで、この伝承をフィクションとすれば、そもそもチベット人歴史家による「インド仏教史」を云々することは不可能となることを彼は承知しているからであろう。ともあれ、Tatz の第二論文を読んだ者には、厳密なレヴェルで Maitri-pa 追放事件の有無は謎のままに留まるとしなければならない。しかし、妥当性・最大公約数のレヴェルでは、これらチベットの「歴史書」から、Maitri-pa であれ、ヤマーンタカの行者であれ、あるいは他の誰であれ金剛乗を信奉した人物が、その実践の故に大僧院から追放されたという物語の核となる歴史的事実は存在したと理解することは決して過大な判断ではない。

もとよりアティシャは複雑な人物である。それは、「最勝なる大乗」と自己規定する金剛乗が、大乗を正面に出す場合と、金剛乗を前面に打ち出す場合の巧妙な使い分けにも由来する。そして、仏説を増益も減損もしないと言明するアティシャの三律儀共存の論法が現実の場面で齟齬を来す象徴的出来事が「Maitri-pa 追放」事件である。

アティシャは在俗瑜伽行者としてその経歴を開始した。伝記によれば、彼は「アヴァドゥーティの行」に限界を感じて出家したと言われる。その出家に際しても彼は、タントラの行は決して捨てないと心に決めている。まさしく彼は生涯を通して金剛乗の信解者であった。しかし問題は、このことが、僧院での上級幹部の地位に身を置いて、比丘たちに僧院の規律を遵守させる役割につくことをアティシャに禁ずるものではなかったことである。

これらの「歴史書」の引用から数多くの問題点が浮かび上がる[32]。僧伽の運営は、律蔵の波羅提木叉に基づいている。他方で、金剛乗を信解する比丘たちは自分たちの規範（三昧耶）である「金剛乗根本過」（*Vajrayānamūlapatti*）および「普通罪過」（*Stūlāpatti*）に明文化された律典をもつ[33]。当然ながら声聞律儀と金剛乗の律儀の両者は根本的に相容れない。ここではその相剋の一端に触れて、アティシャが出家してからも秘密真言の行を実修する決意を述べた箇所と金剛乗の律を遵守している箇所を引用する。

> アティシャが二十九歳になられた時に、ナーランダーの住人（Na len dra na gnas po）で優れて法〔の事情〕に詳しい者に向かって、「私は何れの部派で出家しようか」と言うと、その者が、「汝は秘密真言の行を捨てるのか捨てないのか」と訊ねた。〔アティシャが〕「捨てない」と答えると、「それならば、大衆部僧伽の阿闍梨ジュニャーナパーダ（Buddhaśrījñāna）の法統で出家〔すればよい〕」と言った。そこで、吉祥なる金剛座の〔釈尊が〕大菩提を獲得した場所にある Matibhihāra 僧院において、大衆部僧伽の内の出世間部（'jig rten las 'das par smra ba'i sde pa）の阿闍梨で、ジュニャーナパーダの法統にある長老で持律者であり、修道の真実の一分に住し三摩地を獲得した Śīlarakṣita というお方に親教師（mkhan po, *upādhyāya*）をお願いして、僧名は Dīpaṃkaraśrījñāna と名づけられたのである[34]。

師匠 Dharmarakṣita の下で Odantapurī〔僧院〕において、十二年間〔『大毘婆沙論』を〕聴聞された。またアティシャは六日ずつ学んで、七日目の夕刻に外へお出になった。また六日ずつ〔学び〕日が満ちる度に〔外へ〕出て、〔その仕方で〕聴聞されたのであり、〔金剛乗の律にある〕「声聞の間で七日にわたり共住すべからず（skt. śrāvakāṇāṃ madhye saptāham upavasataḥ）」との意趣であるとゴク（rNgog legs pa'i shes rab）が仰った[35]。

「アティシャ伝」が言及する「声聞との七日以上の共住禁止」は、「普通罪過」第六に出ている。一方で、「根本罪過」の第三は、「瞋恚をもって金剛知友（兄弟）たちの過失を暴くこと（tṛtīyā vajrajñātṛṇāṃ kopād doṣaprakāśane）」である。もちろん、アティシャは「瞋恚をもって」Maitri-pa に対処したとは考えられない。彼の真意は今となっては想像の域を出ることはない。ただ、この地点で声聞乗の律儀と金剛乗の律儀が生の形で対立していることが理解されるのである。

チベット人の宗派間の対立が世俗権力をめぐって何世紀も行われ、多くの血が流されたことは紛れもない事実である。各宗派が自分に都合のよいインド人成就者に起源する虚実織り交ぜた宗派史を創作したのは間違いない。インド人が自ら仏教史を編纂する意図をもたなかったことから、後世の私たちがチベット人の手になる「インド仏教史」に大きく依存しなければならないのは残念なことである。しかし、そのようなチベット人の宗派間抗争を反映した可能性をもつ「インド仏教史」とは離れて、インド仏教には、当然ながら独自の歴史があったことは自明の事実である。Tatz の第一論文は、ネパールに写本として残った「アドヴァヤヴァジラ伝」を研究の俎上にあげる理由からか、同資料が典型的な「聖者伝説」[36] であることを軽視したのか、Maitri-pa の人生に数年間の遍歴の旅が実際にあったと無批判に決めつけている点が奇妙に思われる。Śabari-pa 探索の旅は、Maitri-pa の精神の深奥への沈潜と言えるものであり、彼の『天路歴程』と捉えられる物語である。おそらくそれは心的な現象を出るものではなく、その種の精神的遍歴は Maitri-pa の人生のいつの時期に起こっても可能な事象である。チベット人の歴史書がすべて認める「Maitri-pa 追放」事件を限りなくフィクションにもっていく Tatz が出した論法が、一定の説得力をもつことを考えると、彼のこの「聖者伝説」の取り扱い方はあまりにナイーヴであるとしか言いようがない。

5. 僧院追放後のマイトリパ

ヴィクラマシーラ大僧院を追放された後の Maitri-pa の事績について具体的に語るチベットの歴史書は少ない。彼はヴィクラマシーラ以外の大僧院、もしくはより小規模の僧院（*vihāra*, gtsug lag khang）に入住できたのであろうか。

中国人仏教僧の見聞録が述べるように、インドの仏教僧院は「大小共住」であった。筆者が強調する「金剛乗の比丘」は当然ながら大乗の範疇に属して行動していたことになる。彼らは声聞乗の比丘たちと共住して僧伽を構成していた。西蔵大蔵経の奥書およびチベット人の歴史書に見られるこの時期の金剛乗の比丘たちの人数の多さから構成されるイメージとは別に、いつの時代にも僧院で優位を保っていたのは伝統仏教である声聞乗の比丘たちであったと考えられる。

引用から、Maitri-pa の追放はヴィクラマシーラ僧院の僧たちの協議の末による決定であったことが分かる。この場合、アティシャは金剛乗の比丘としての立場は表に出さずに僧伽全体の立場に立って行動したのである[37]。その場合、ターラナータが言うヴィクラマシーラ僧院の歴代「真言阿闍梨」の職分とは正確には何であろうか。後期インド仏教史、より正確には、金剛乗史に名を留める人物たちの「大小共住」であった僧院での役割・職分の解明が今後の研究課題として残される。

この場合、Dutt［1962: 353］が出す、「パーラ王朝の下で東インドで展開したそれぞれの僧院は一緒になって一つのネットワークを形づくり、内的に相互に関連をもつ諸施設の一つの群と見なすことができよう」との結論が参考になる。この複数の僧院からなるネットワークが存在し、有効に機能していたことは、発掘による出土品や奉献された諸の碑文などの考古学的資料と西蔵大蔵経の奥書の記述・チベット人の手になる歴史書などの精査から既に証明されている事柄である[38]。アティシャ自身が、ナーランダーで出家し、オーダンタプリーで小乗の論書を学び、ソーマプリーで「勇者の饗宴」に参加していることからも、このネットワークが初期仏教以来の「四方僧伽」として機能していたことが分かる。その場合、ヴィクラマシーラ大僧院を「非行」の故に追放された人物が、四大僧院のいずれかに復帰できたかどうかについて筆者は否定的にならざるを得ない。「アドヴァヤヴァジラ伝」やチベット人の歴史書においても、Śabari の教誡を得た Maitri-pa は Madhyadeśa へ帰還するが、ヴィクラマシーラ僧院に戻って止住したとは書かれていない。

『青冊史』や dPag bSam lJon bzang に見られる Maitri-pa の弟子についての記述から、彼はガンジス河を渡り、バンガラ地方（現在のバングラデシュ）の宗教施設（セツルメント）を根城として宗教活動を活発に行っていたと想像される。「聖者伝説」の一つである『マルパ伝』では、Maitri-pa の住居は以下のように出る。

〔Maitri-pa を訪れる〕道中で、〔マルパは〕「Maitri-pa はどこに住んでいますか」と旅人に尋ねたので、〔旅人は〕「Ri me ltar ’bar ba 祠堂（dgon pa）にいます。その道を旅するのは厳しい。貴方は行かない方がよい」と言ったので[39]（後略）

〔マルパは〕東方の成就のガンジス河を渡り、Ri rab tu ’khrogs pa 祠堂で、王者 Maitri-pa の御足に頂礼した[40]。

「聖者伝説」であることを割り引いて考えても、Maitri-pa が交通の要衝に建立された僧院に住していたのではないことが言えよう。Barua［1969: 163］の Devīkoṭ の項にはつぎのように出る。

Bāngarh 村の近くにも Devīkoṭ または Devakoṭa-vihāra があり、その村落は北ベンガルの町 Dinajpur の約 18 マイルに位置する。有名なタントラの学匠 Advayavajra や Udhilipā と比丘尼 Mekhalā がかつてその vihāra に住した。

これまでの記述を勘案すれば、Maitri-pa は自らの宗教施設を建立している。それは『マルパ伝』が述べる Ri me ltar ’bar ba または Ri rab tu ’khrogs pa であろう。彼は多くはそこ

に住んで弟子の養成などをおこなったであろうが、他にも、『Tāranātha 仏教史』が出す明妃 Gaṅgādharā の住む Kusala の森に行くこともあったであろう。さらに Barua が述べる Devīkoṭa-vihāra に住するなど Bangala 地方で広く足跡を留めたと考えられる。

小結

ヴィクラマシーラ僧院における Maitri-pa の問題となった所行の具体的内容は不明である。分かることは彼が金剛乗の見・修習・行の三アスペクトすべてを実修しようとした姿勢である。誰であれ金剛乗の単なる理論家ではなく、教相と事相の双修に励んだ人物がいたとすれば、その帰結は大僧院からの追放となったことであろう。ナクツォ訳経師の情報を真正とする限り、Maitri-pa は酒を隠しもち、金剛乗のサークルに属する女性（瑜伽女）との何らかの接触をもっていたことを咎められたものと思われる。この事件から、「大小共住」の僧院で酒の儀礼的使用も戒律違反で追放となるのであれば、「酒と肉と性瑜伽を不可欠とする聚輪」などの戯論の行、行の誓戒（*caryāvrara*）、明の誓戒（*vidyāvrata*）などの無戯論の行の実修はおよそ不可能なことである。それでは金剛乗の文献に頻出するこうしたタントラの実践は実際に行われたのであろうか。または単なるフィクションであろうか。さらに実践されていた場合は、どこで行われたのであろうか。「Maitri-pa の僧院追放」事件が含意することは、インド仏教金剛乗では、「ヴァーギーシュヴァラ準則」によって、僧院止住の比丘から在俗瑜伽行者に立場が変わっても彼らの持金剛者のアイデンティティ（*āśraya*）が保障されることである。因みに逆方向で、在俗瑜伽行者から僧院の止住者（比丘）となったアティシャもそのアイデンティティは持金剛者であった。在俗瑜伽行者が建立し止住した小規模な道場（祠堂 , *maṭa*）は金剛乗の行を誰憚ることなく実践できた空間のはずである。大僧院のネットワークとは別に、作業仮設としての小規模な「成就者（*siddha*）共同体」を想定し、実際に地続きであった両者の協業を考慮することでインド後期仏教史の多くの謎が解明されることは間違いない。本稿は「Maitri-pa の僧院追放」の記述を取りあげ、それが誰であれ僧院に止住していた比丘が在俗瑜伽行者として新たな宗教生活を紡ぎ出すパターンと類型化することによって、仏教徒の世界の実像へ迫るひとつの試みとなるものである。

一次資料

アティシャ伝（広本）: *rNam thar rgyas pa* 2.Teil, Helmut Eimer, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1979.
: *Complete Biography of Atisha*（N と 略 ）, by Nag tsho lo tsa ba Tshul khrims rgyal ba, E. Kalsang Buddhist Temple,Varanasi, 1970.

アティシャ伝（チム本 , B と略）: *rNam thar rgyas pa Yongs grags*, Lokesh Chandra, ŚPS vol.311,1982.

学者の宴 : *mKhas pa'i dga' ston*, by dPa' bo gtsug lag, ed. Lokesh Chandra, International Academy of Indian Culture New Delhi, 1959.

七教勅 : *bKa' babs bdun ldan*, by Tāranāta, *The Collected Works of Jo nang rje btsun Tāranātha,* vol.16, Smanrtsis shesrig Dpemzod, C.Namgyal & Tsewang Taru, Leh, 1985.

青冊史 : *Deb ther sngon po, The Blue Annals,* by 'Gos gZhon nu dpal, Śata-Piṭaka Series vol, 212. ed. Lokesh Chandra, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1974.

Tāranāta 仏教史 : *Dam pa'i chos rin po che 'Phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar ston pa dgos 'dod kun 'byung*, by Tāranāta, *The Collected Works of Jo nang rje btsun Tāranātha,* vol.16, Smanrtsis shesrig Dpemzod, C.Namgyal & Tsewang Taru,Leh, 1985.

菩提道灯 : *Bodhipathapradīpa,* by Dīpaṃkaraśrījñāna, Toh 3947.

菩提道灯細疏 : *Bodhimārgadīpapañjikā,* by Dīpaṃkaraśrījñāna, Toh 3948.

マルパ伝 : *sGra sgyur mar pa lo tsā ba'i rnam thar mthong ba don yod,* by gTsang smyon heruka, E. Kalsang Buddhist Temple, Varanasi,1970.

明灯史 : *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*, by Las chen kun dga' rgyal mtshan, 西蔵人民出版社 , 2003.

rNal 'byor byang chub seng ge'i dris lan : by Grags pa rgyal mtshan, *The Complete Works of the Great Masters The Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism* vol.3.

Padma dkar po : by Padma dkar po, ed. Lokesh Chandra, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1968.

dPag bsam ljon bzang : by Sumpa mkhan po, *Pag Sam Jon Zang History of the Rise and Downfall of Buddhism in India*, ed. Sarat Chandra Das, Presidency of Jall Press, Calcutta, 1984(1908).

二次資料

奥山直司　「ある聖者伝説 : アドヴァヤヴァジラ伝〈Amanasikāre Yathāśurutakrama〉にみえる修行者像」『インド思想における人間観』平楽寺書店 , 1991.

酒井真典　「事師法に関する五十頌」『酒井真典著作集』4, 法蔵館 , 1988.

静春樹　「金剛乗の比丘アティシャと秘密・般若智灌頂禁止の問題」『印仏研』61-1, 2012.
「アティシャと金剛乗の行」『印仏研』62-1, 2013.
『ガナチャクラと金剛乗』起心書房 ,2015.

羽田野伯猷「カーダム派史」『チベット・インド学集成』1, 法蔵館 , 1986.
A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tāntric Buddhism in India : Advayavajra, alias Mnga' bdag Maitrī-pa,『チベット・インド学集成』3, 法蔵館 , 1987.

藤田光寛　「パーラ王朝の諸王が建立した四大仏教寺院研究」『高野山大学密教文化研究所紀要』6, 1993.

密教聖典研究会　「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳（1）（2）」『大正大学綜合仏教研究所年報』10(1988), 12(1990) .

頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館 , 1990.

Barua, Dipak Kumar,　*Vihāras in Ancient India, A Survey of Buddhist Monasteries*, Indian Publication, Calcutta, 1969.

Chattopadhyaya, Alaka, *Atīśa and Tibet,* Indian Studies, 1967.
（tr.）*Tāranātha's History of Buddhism in India,* Indian Institute of Advanced Study, 1970.

Davidson, Ronald,　*Tibetan Renaissance: Tantric Buddhism in the Rebirth of Tibetan Culture*, Columbia University Press, 2005.

Dutt, Sukumar,　*Buddhist Monks and Monasteries of India*, George Allen and Unwin Ltd., 1962.

Dasgupta, Nalini Nath,　The Buddhist Vihāras of Bengal, *Indian Culture*, Journal of the Research Institute, 1934.

Nālandā Translation Committee,（tr.）*The Life of Marpa: The Translator*, Shambhala, 1995.

Roerich, George,（tr.）*The Blue Annals*, Delhi, Motilal Banarsidass, 1976（1949）

Schiefner, Anton, (comp.)　*Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione,* Sankt Petersburg, 1868.

Sankalia, Hasmukh Dhirajlal, *The University of Nalanda*, Oriental Publishers, 1972.

Tatz, Mark, The Life of the Siddha-Philosopher Maitrīgupta, *Journal of the American Oriental Society*, vol. 107, 1987.

Maitrī-pa and Atiśa. *Proceedings of the 4th International Seminar on Tibetan Studies,* München, 1985.

Templeman, David,（tr.）*The Seven Instruction Lineages,* Library of Tibetan Works and Archives, 1983.

---

1 『印仏研』61(1), 2013.

2 『印仏研』62(1), 2014.

3 酒井［1988: 154~159］

4 『Tāranātha 仏教史』ch.38, 203a5-207a5., Schiefner［1869: 230~234］, Chattopadhyaya［1970: 325~329］

5 『アティシャ伝』p.252(No.304)

6 Davidson［2004: 144~145］

7 Tatz［1988: 480］

8 『アティシャ伝』p.39(No.055)
[L18] gser gling pa chos kyi grags pa byams pa che bas Mai tri pa yang zer / Mai tri pa gsum byung ba la / rgyal sras Mai tri pa ni rje btsun byams pa / mnga' bdag Mai tri pa ni Jo bos bi kra ma nas bton de yin / 'di gser gling Mai tri bya ba de yin gsung /

9 『アティシャ伝』P.78(No.110)
[N51L12] [B4b2] dngos grub brnyes pa'i bla ma gsum *mnga' ba la(B yod pa'i) / *Ku su lu chung ba / gshin rje gshed kyi rnal 'byor pa / A ba dhū tī pa gsum gyi chos gzigs /(B *om.*)（略）**[N52L1]** Ka ma la rakṣi ta zhes *bya ba(B kyang bya) / gshin rje gshed kyi rnal 'byor pa chang 'o mar brgyur ba / *gshin rje gshed kyi rnal 'byor pas chang 'thungs pas / bton nas sgo la char mi btub gsungs nas rtsig pa la thal gyis gshgs nas chab la gding ba bting nas gshrgs pas /(B *om.*)（略）**[N52L16]** chu bo gaṅgā la gding ba btings(B bting) nas *bzhud par(B byon pa'i) nus pa'i(B *add.* mnga' ba'i) bla ma de la gsang sngags kyi bka' drin phal cher mnos(B brnyes) /

10 密教聖典研究会［1988:10~37］, Toh 2229, Ota 3073.

11 密教聖典研究会［1990: 52~55］, Toh 2233, Ota 3077.

12 Toh 2234, Ota 3078.

13 『アティシャ伝』p.139(No.195)
[N97L13] [B35b1] khyad par du mnga' bdag Mai tri pa(B *add.* zhes) bya ba de de na bzhugs pas(B pa'i) / *khong gi(B *om.*) lta ba(B *om.*) spyod pa(B *om.*) 'bras bu gsum ga(B ka) la *bla ma(B *om.*) Shanti pas skyon bkal(B bkod) nas sgo *glad la(B ldang du) bris so(B *om.*) // *Mai tri pa khong gis kyang lta ba nges sel bya ba dang / rmi lam nges par bstan par bya ba dang / sgyu ma nges par bstan pa bya ba'i bstan bcos brtsams nas skyon [p.98] bsal skad /(B *om.*) Mai tri pa de rnal 'byor ma la thugs dam mdzad pas / *rnal 'byor ma'i(B de'i) dam rdzas kyi chang cig sbas(B *add.* nas) yod pa(B pa'i /) btsun pa cig gis mthong nas dge 'dun la bshad / dge 'dun rnams na re / nyams pa gnas nas 'byin dgos zer nas bskrad pas bzhud du ma *gnang bar(B 'dod par / 'di) nga la mi gnod *kyi byas pas(B kyis zer) / khyod la mi gnod kyang gzhan la gnod zer(B byas) nas *bton pas(B phyung bas /) nyams pa sgo la 'gror mi rung gsungs(B zer) nas rtsig pa la thal gyis bzhud do(B *om.*) //

14 『アティシャ伝』p.140(No.196)
[N98L7] [B35b1] Jo bo'i thugs dgongs la legs sam ma legs sam(B *om.*) snyam nas de'i nub mo sgrol ma la mchod pa phul bstod pa byas(B *add.* nas) gsol ba btab pas / Jo bo brang khang na *gnyid bag tsam gzims pa'i snang ba la(B cung zad mnal ba'i mnal lam na /) bu ma legs so(B zhes) bya ba'i sgra lan gsum byung / phyir phyin nas bltas pas ci yang ma gzigs / yang nang du byon nas lha la gsol ba btab pas jo mo sgrol ma'i zhal nas dge slong ci bde ba *bton pa'i gseb(B phyung ba'i nang) na sems dang po bskyed pa'i byang chub sems dpa' gcig bzhugs pa de mnga' bdag Mai tri pa yin / byang chub sems dpa' la sdig bsags na rnam smin shin tu che'o gsung / jo bos 'di la rnam smin ji lta bu zhig(B cig) 'bying zhus pas / ri rab la lan gsum 'khor ba'i sems can chen po cig(B zhig) tu skyes nas bya sna tshogs kyis za bar byed gsung / **[B36a]** 'o na de la ci(B cis) phan(B lags zhes) zhus pas byang phyogs su phyin(B song) nas theg pa chen po'i chos dar bar byas na phan / nyi ma re *la sa

tstsha(B re zhing tsha tsha) bdun bdun btab na phan *gsungs de(B gsung /) don la(B *add.* jo bo sems can gyi don la) bod du bzhud(B ’byin) du ’jug pa’i snyad yin gsung /

15 **[Da2a7]** Mai tri pa ni / dang por **[2b]** phyi nang gi grub mtha’ phal che ba mkhas par gyur kyang / des

16 chas zhu ba la yang yar ’byon zhing ’dug pa の意味は未詳。Nālandā Translation Committee［1995: 77］では以下である。Atiśa received many teachings from Nāropa; So Marpa knew who he was.

17 **[p.93L7]**rje Mar pas ’byon la nyang stod laṃ byon pas bzhengs kyi glang po snar Jo bo rje bod du byon pa dang mjal bas sngar Nā ro pa’i drung du Na len dra’i chos khrims mdzad pa rgyal rigs kyi paṇḍi ta zhi dul can zhig chas zhu ba la yang yar ’byon zhing ’dug pa de yin par shes nas / mga’ bdag Mai tri pas dam rdzas brten pa thugs su ma shong ba’i rnam pas skur pa cung zad btab rung / dge ’dun so thar ba spyi’i khrims yin phyir khong rang la rang ’dod med pa dang / zhi dul che zhing bod du **[p.94]** sangs rgyas kyi bstan pa spel ba la byon pas thugs la dga’ spro dang dag snang shar te /

18 **[p.290L15]** Jo bos ci bder spyod pa shas gcig gnas nas kyang phyung / khyad par Mai tri paṇḍi tas rnal ’byor ma’i dam rdzas chang zhig khyer ba gzhan gyis mthon nas ’di khyed la mi gnod kyang gzhan la gnod pas bzhud par zhu gsung nas phyung bas nyams pa sgo la ’gro la ’gror mi btub gsung nas rtsig pa la ma thogs par bzhung / Jo bos legs sam ma legs snyam nas sgrol ma la gsol ba btab pas bu ma legs so zhes pa’i sgra lan gsum byung ste gzigs pas sgrol ma’i zhal nas Mai tri pa sems dang po bskyed pa’i byang chub sems dpa’ yin byang chub sems dpa’ la sdig bsags pa rnam smin shin tu che ste ri rab la lan gsum bskor ba’i sems can chen po gcig tu skyes te bya sna tshogs kyis za bar ’gyur / bod du phyin nas theg chen dar bar byas / nyin re la sā tsha bdun re btab na las ’byang gsungs /

19 **[p370L7]** Mai tri pa ni / yul dbus su bram ze’i rigs su ’khungs /〔do ha’i lo rgyu sogs yongs grags ltar byas pa ste / rje Mar pas / khyed ’gro ba’i don du jam gling ’dir / rgyal po’i rigs su skye ba bzhes / ces gsungs pas rgyal rigs su ’thad to //〕sgra la mthar phyin par mkhyen nas Na ro pa dang rtsod pas Na ro pa rgyal ste slob dpon du bkur / bram ze’i btul zhugs dang bslab par bya ba mthar phyin nas Shānti pa las rab tu byung / mtshan Mai tri ste byams par grags / rig pa’i gnas lnga la mkhas pa zla med par gyur / Bi kra ba la shī lar bzhugs tshe yi dam rnal ’byor ma’i nang gi dam rdzas bsten pa Jo bo rje lha gcig sogs zhal ta pas mthong ste dge ’dun gyis gnas nas phyung bas nyams pa sgo la ’gror mi rung zhes rtsig pa la thal la bzhud / mdun na chu bo gaṅ gā yod pa la gding ba bting ste g’yog gu sa ka ra’i lag pa nas bzung ste song bas nyi ma nub po ces dge ’dun kun gyis dus / Jo bos gzings bskor ste rjes su ’dzin par zhus pas da lta lcags ri gcig gi paṇḍi ta phan tshul rjes su ’dzin par mi nus kyi ngas bla ma dam pa cig dang mjal bar rmis pas mjal na rjes su bzung ngo nga’i brang khang na sgrol ma’i bris sku zhig yod pa de la yi dam gyis cig gsung /

20 gnyid kyis log ba las sod pa na chos thams cad brjed ’dug nas lceb dgos snyam tshe nam mkha’ dngos su byon ste / ma skyes pa yi chos rnams la / shes ces bya ba ga la yod / ma ’gags pa yi chos rnams la / brjed ces bya ba ga la yod / sogs gsungs ste khyod yul dbus su song / nga’i ’dra ’bag gyis la slob dpon du zung / snod ldan rjes su zung zhig gsung / de lar mdzad ste seṅge’i sgra bsgrags pas mu stegs Na ti ka ra btul / Shānti pas kyang rtsod yig bzhag ste bros / gzhan sus kyang rtsod ma nus ste rdo rje gdan gyi chod dpon mdzad / Ma ga dha’i rgyal pos gtsug tu bkur bas mnga’ bdag chen po Mai tri pa ces mtshan ’don ste ri bo me ’bar gyi dgon par bzhugs A ma na(em. ṇa) si’i chos skor nyer bzhi mdzad /

21 **[286L6]** da ni jo bo Nā ro pa’i slob ma tsha ba brgyad kyi nang tshan slob dpon chen po Mai tri pa’i lo rgyus ni / paṇḍi ta rgyal ba’i lha’am / spyod ’chang **[287]** mgon po’am / ’bar ba’i gtso bor grags pa de tshe ’phos nas ring zhig na yul dbus kyi grong khyer gra byi lar bram zer’i rigs su ’khrungs / mtshan Dha rma / skyes stobs kyis shes rab che bas mu stegs kyi sgra khang du zhugs nas pāṇi byā ka ra ṇa / de nas lo dgu’i ring la mu stegs byed kyi grub mtha’ ma lus pa bslabs / de dag gi nang du mkhas pas bsnyengs pa che / mtshan dbyug gu gsum par btags / khong gi ya ne Nā ro pa’i phyag rgyar yod pas / de na re / mu stegs kyi chos la tshe ’di’am mtho ris grub pa’i nus pa yod kyang ’khor ba las mi ’phag pas sangs rgyas mi ’byung / de bas dpal Nā ro pa la chos nyon cig zer ba la / de dang rtsod nas su pham pa des ’dus par rigs zer / der khrid de Nā ro pa dang bstan pa rgyal du btsugs nas rtsod pas Nā ro pa rgyal te / mu stegs kyi rtags bskyur rab tu byung / Dha rma bo dhi zhes btags / bde dgyes la sogs pa’i dbang bskur / gsang mtshan Badzra rā ga’o // mtshan nyid dang rgyud sde du ma bslabs / da khyod phyag rgya ma gcig sten la nags khrod du sgoms shig gsungs pas **[288]** bdag mu dra’ang mi ’tshal / nags khrod du mi sgom / thos pa phul du byung ba zhig bgyid par zhu byas pas / Ra tna ā ka ra shā nti pa’i slob dpon Tri ta tsi nta ma ṇi la sbyor /

der sems tsam lo gcig gsan / de nas ko pi ka’i yul du Shā nti pa mjal bsnyen par rdzogs / mtshan Mai tri gu pta zhes btags te sde snod gsum sbyangs / der Mai tri pas rab tu mi gnas pa bzung / Shā nti pas rnam rdzun pa bzung ste ’bel gtam byas pas / Mai tri pa rig pa bzang nas slob dpon khros chos gos bshus nas sgor bton / sgo rtsa na phyag dar khrod pa’i gos dum cig ’dug pa blangs te gnas de dang mi ring ba na sgrol ma mngon par dga’ ba’i lha khang du sgrol ma la gsol ba ’debs kyin zhag bdun bsdad pas / tho rangs rmi lam du bu mo mdzes ma lo bcu drug tsam lon pa zhig byung nas / A wa dhū tī pa khyod ’dir ma ’dug par shar phyogs su ’gron bu zad pa’i gtsug lag khang na spyan ras gzigs bzhugs kyi / des lung ston par ’gyur ro gsung nas mi snang /

mnal sad nas rim gyis kha sa rpa ṇir byon nas thugs rje chen po la gsol ba ’debs kyin bsdad pas / lo gcig lon pa’i **[289]** tho rangs mnal thum zhig log pa’i rmi lam du mi reng dkar po zhig byung nas A wa dhū ti pa khyod ’dir ma ’dug par lho phyogs su song zhig / ’di nas zla ba phyed dang lnga’i sa na dpal gyi ri yid pham pa sems dal gso ba zhes bya bar rnal ’byor gyi dbang phyug Sha wa ri yab yum bzhugs kyi der song dang / ma rtogs pa dang / log par rtog pa dang / the tshom thams cad gcod par ’gyur ro zhes gsung / de nas A wa dhū ti pa zhes mtshan thogs /

22 **[293L5]** khyod nga la the tshom zos pas tshe ’di la mchog gi dngos grub mi thob / ’chi khar rjo rje rnal ’byor mas bsus te bar dor mchog gi dngos grub par ’gyur ro // zhes lung bstan te mi snang bar gyur to // de nas lam du thang **[294]** chad de nyal / gnyid sad nas ri khrod pa la zhus pa’i chod rnams la bsam mno btang bas thams cad brjed ’dug / da log na mi la ngo tsha lceb bam bsam pa dang / ri khod pa mdun du byon nas Mai tri pa khod ci nyes gsung / ngas chos thams cad brjed ’dus pas lceb bam bsam gsol bas / gnyis med rdo rje A wa dhū ti pa / ma syes pa yi chos rnams la / brjed ces bya ba ga la srid / ma ’gags

pa yi chos rnams la / brjed ces bya ba ga la srid / khams gsum ye nas grol ba la / ma rig pa yis bsgrubs pa yin / ’khor lo bde mchog bde ba’i mchog ma skyes pa yi rang bzhin nyid / ces gsungs pa dang / Mai tri pa la rtogs pa shar sa dang po’i ye shes sgrib med du gzigs so // ri gsum slob dpon phyag ryga de dag gis mdzad pa thams cad snying po’i don ston pa’i brdar go ste / bla ma la rtogs pa phul ba / chos rnams thams cad stong pa nyid / stong pa nyid dang snying rje gnyis / gnyis su med pa slob dpon yin / rnal ma’i don la rnam dpyad na / gang ltar byas kysng grol bar ’gyur / dmigs pa med pa / bcos ma ma yin pa / dran pa rdul tsam yang med pa’i don zhig ngas rtogs / da ni su **[295]** la’ang dri bar mi bya’o zhes gsungs / mtshan gnyis med rdo rjer thogs nas yul dbus su phebs so // de’i tshe thams cad kyis Mai tri pas sha ba ri mjal lo zer nas grags pa chen po byung // ma dad pa rnams kyis sha ba ri dang ma mjal bdud kyis byin gyis brlabs so zhes bsgrags / de’i tshe mu stegs kyi ston pa Ma tring se na zhes bya ba mu stegs kyi rigs pa smra ba / ’khor nyis stong dang bcas pa zhig na re / kho Sha ba ri dang mjal na ngas mi thub / ma mjal na khos nga mi thub pas rtsod pas shes so zer / rgyal pos Mun dzas rtsod pa’i ra bar khri bshams / Shā nti pa la sogs pa’i nang pa dang phyi rol pa rang gi tshar bcad kyi dpang po bkod / rgyal pos lam thams cad chag chag btab / shing rta’i steng du spyan drang nas su rgyal ba’i rjes su pham po ’jug par byas nas / Mai tri pas snga rgol byas / khos phyi rgol byas / lta ba rab tu mi gnas pa / sgom pa yid la mi byed pa la sogs pa’i dam bca’ mdzad de rig pa bkod / lung gis rgyab skyor bstan pas / khos ma thub nas Mai tri pa chen po rgyal bas rgyal ba zhes grags / kho ’khor bcas rab tu byung /

23 de nas **[296]** slob dpon Shā nti pas de la skyon bris te rdo rje gdan gyi dus mchod kyi tshe sgo’i ya lcibs la sbyor ro // de Mai tri pas ma gzigs / de nyid mi rnams na re / Shā nti pa la Mai tri pas rtsod ma nus zer / sang Mai tri pas Shā nti pa la kha sang yi ge ngas ma mthong ba yin / de ri ba cis kyang ’byon par zhu byas pas Shā nti pa ma byon / bang chen lan bcu gsum gyi bar bstud de btang bas kyang ma byon par bros / de phan dus mchod kyi bdag po khong gi mdzad pa la / de nas rgyal pos Mai tri pa la phal bas mtshan mnga’ bdag ces te / thams cad du mnga’ bdag rgyal ba Mai tri pa zhes grags so // de dus dge ’dun gyi sde O ta nta pū ri / shrī na la nda / rdo rje gdan / bi kra ma la shī la bzhi mchog yin / phyi ma’i ’byung ba’i gtsug lag khang zhes bya bar bzhugs / ’chad nyan mdzad / bstan bcas du ma sbyor /

24 de nas ring po zhig na dam tshig gi rdzas la chang nyos pas / dpal Mar me mdzad dge skos yin pas gzigs te / sde nyams kyi dogs nas rgyal po la ’phin brjangs / rgyal pos pho nya brtag tu bcug pas ’dug par mthong ste gsol bas / rgyal pos paṇḍi ta rnams sbran nas **[297]** mnga’ bdag gi spyan sngr phyin nas khyod kyis chang btungs pas chad pa sgrubs shig / ngas ma btung khyed rang rnams kyis ’thungs so // der skyugs nas shes snyam skyug tu bcug pas / Mai tri pas dgyes rdo rje gyi man ngag byas pas khong tsho la chang skyugs / khong rang la ’o ma skyugs / der Mai tri pa ma rangs par dge ’dung gyi dbus nas rtsig pa la thogs med du byon / gaṅgā la khri brnyan sa le’i pags pa bting nas gshegs so // phar ’gram du thams cad kyis bzhugs par gsol bas / bzod pa bzhes gzhugs par ma gnang /

25 rgya gar shar phyogs ri bo me ltar ’bar ba’i dur khrod du dgon pa btab ste bzhugs so // skabs shig badzra pā ṇi khyod song la nye ’khor gyi slob ma rnams sdus shig gsung nas bsdus / de nas mchod pa rgya chen po dang tshogs kyi ’khor lo bsham nas slob ma rnams la byin rlabs kyi rten re stsal / zhal chems ngag tu gsungs / ’khor rnams kyis lo mang po bzhugs par gsol ba btab pas sdod kyang dbang yod de / dngos grub sgrub pa’i dus las nyams par ’gyur bas mi rung gsung / rjo rje rnal ’byor mas bsus **[298]** te dgung lo bdun cu rtsa lnga la gshegs so //

26 **[564L5]** yang shā bā ri’i slob ma dus phyis byung ba ni mnga’ bdag chen po Mai tri pa ste / mtshan ni Mai tri gu pta’o // de yang bam ze mu stegs kyi paṇḍi ta phyis Nā ro pa dang mjal nas nang par gyur te dbang dang gdams ngag zhus // Nā lendar rab tu byung ste Ratnā ka ra shanti pa sogs mkhas grub kyi bla ma mang por bsten pas paṇḍi ta chen du song nas / bi kra ma la shī la rnam gnon tshul gyi gtsug lag khang du bzhugs / paṇḍi ta’i bya ba dang sgrub pa spel mar mdzad cing yod pa las rdo rje rnal **[565]** ’byor ma zhal gzigs shing / ting nge ’dzin gyi grogs su ’gro ba’i dus yin par mkhyen nas nang gi kun tu spyod pa gsang zhing spyod pa yin pa las / dge tshul zhig gis slob dpon bud med dang lhan cig chang gsol ba mthong nas tshogs su rgol du byung ba la / slob dpon gyis ’o ma skyugs / dge tshul de rang la chang skyugs pa’i sbyor ba byas pas chang skyugs / re zhig gleng ba med / yang lan cig dge bskos la sogs pas rig nas brdzir ’ongs pa na chang ’o mar bsgyur / bud med mi snang bar byas sam dril bur bsgyur zer ba’ang yod / yang phyis lan cig ’jabs nas brdzis pas / sngags kyis bsgyur ’ong ma byung bas dge ’dun gyis gnas dbyung byas / chu bo Gaṅgā la lpags gang na bting nas bzhud / de dus dge bskos jo bo rje yin skad / de’i sgrib sbyong la mnga’ bdag rang la chos gsan pa dnag / bod du byon yang zer / sā tstsha ’chag med mdzad kyang zer //

27 der nus pa ni dpag tu med pa brnyes kyang de kho na nyid cung zad ma rtogs pa la / yi dam kyi lung bstan byung nas dpal gyi ri la Shā bā ri pa ’tshal du bzud pa / lha phyogs kyi lam du rgyal bu Sa ka ra dang ’phrad / de dang lhan cig dpal kyi rir phyin pas de dang nyi ba’i mi rnams na re / Shā bā ri pa sngon gyi grub thob yin / da lta ga la rnyed zer yang / rtse gcig tu gsol ba btab pas zla ba drug na mjal te / Shā bā ri pa’i dbu’i ral pa bshig pas sro shig nyil kyis byung ba yum gnyis kyis gsol bar ’dug pas Mai tri pa cung zad thugs ma dad / rgyal bu des zhabs la phyag byas pas / a ya dza ra wa la hu gsungs pas de nyid du grol zhing ’ja’ **[566]** lus su gyur pas thugs dad pa ’khrungs / yang btsun mo gnyis kyis phag dang ri dgags dang rma bya gsod pa gzigs pas cung zad ma dad pa se gol gtogs pas der mi snang bar gyur / ’on kyang dbang bskur zhing gdams pa dang rjes su gdams pas gnas lugs gzigs pa’i ye shes skyes / dpa’ bo mkha’ ’gro mtha’ yas pa’i gtso bar gyur / da ni ral gri la sogs pa grub pa brgyad bsgrubs nas tshe bskal par gnas pa’i rig pa ’dzin pa bya snyam rjes bsgrubs pas grub pa’i / Shā bā ri pas sdigs mdzub pas thal bar song / da khyod sgyu ma des ci bya gnas lugs kyi don rgya cher shod ces gsang ba bzhin slar yul dbus su byon no //

28 Toh 2252, Ota 3097.

29 bod rnams de rjes Shā nti pa dang rtsod pa byas pa sogs kyi lo rgyus ’chad pa ni don la yang mi rigs par snang zhing / ’phags pa’ yul na kha skad tsam yang med gsung / bod na de ltar grags zhus pas / bho ṭa sba na bā ktya sā ma ya tsho ṭe ka si ddhi sā dha ka kyā / zhes gsungs de bod pa khyi’i swa ba dam tshig spangs pa’i ga ba thob dang sgrub pa po gang zhes pa’o // des na de ni bod blun po rnams kyi brdzun phal ka sgrigs su shes par bya’o // slob dpon ’dis yul dbus su yid la mi byed pa gsungs pas ’ga’ zhig yid ma ches pa la / gzhung gi khungs grub snying gi skor rgya cher gsungs / rgyud kyi dgongs pa med zer ba

dbyes rdor dang ’dus pa rtso bor gyur pa’i lung gis bsgrubs / su las thob dris pa la / dbang nges bstan brtsams te Ri khod pa’i man ngag nyams su myod bar zhes bod rnams zer / dur khrod bsil btsal du grong ’jug gi tshul mang po bstan / ji ltar bzhed pa thams cad nag po chen po bsgrubs pas dpag tshad brgya phrag mang po’i pha rol nas brtan g’yo’i dngos po nam mkha’ las khyer ’ongs te / ma la ba’i rgyal po’i bu mo nam mkha’ las khyer ’ongs pa phyis mkha’ ’gro gi gāṅha ra zhes par grags / phal cher ni shar phyogs ku sa la’i nags su tso bar bzhugs / mkha’ ’gro lce spyang du sprul nas gtor ma len pa dang / lta stangs grub pa dang / sku lus gzugas na tshogs su sprul pa sogs ngo mtshar dpag tu med pa mda’ / ngon Shā bā ri pa la ma dad pa gnyis po des sku lus gnas ma gyur / dgung lo bdun cu tsam na sku ’das te bar dor phyag rgya chen po mchog ’grub bo //（略）

30 dPag bSam lJon bzang, p.118L22~119L1.
de dus bram ze’i paṇḍi ta zhig Nā ro pa dang mjal nas nang par zhugs te rab tu byung zhing Rat na ā ka ra shan ti sogs bsten nas mkhas par gyur te bi kra ma la shī lar mdo sngags zung ’brel nyams len mdzad skabs chang ’o mar bsgyur nas gsol kyang Jo bo rje dge bskos yin dus dbyung tshe gaṅgar pags steng nas brgol sogs grub rtags mang du bstan zhing /

31 『青冊史』Ca.35b7-36a7., 羽田野［1986: 168~169, 174~175n.6］

32 この問題については、四十年前に、Sankalia［1972: 217］が以下のような要約をしている。
学僧の実際の生活に極めて重要な光を当てること以外に、この逸話はまた別な観点からも意義をもっている。まず第一に、もし何らかの対処行動が取られるべきだとしても、それは僧伽全体の協議を経て初めて取られることが分かる。つまり、十世紀と十一世紀に至っても、仏教徒の僧伽は、我々が「共和制」と呼ぶ特徴的な組織運営を行っていたのである。第二に、秘密裡であれ僧院で酒が用いられた事実の決定的な証拠が得られることである。さらに、高い階梯のタントリズムは戒律違反を決して厭わなかったこと、そして、もしそのような違犯が僧伽の権威の注意を引くところとなれば、違犯者は厳しく罰せられたことである。最後に、この逸話からアティシャの高い義務感と真実への信愛を示す一例が見られることである。その学僧を追放することで正しく振る舞わなかったと感じて、彼は尊格の教示を請問しているのである。

33 頼富［1990:444~467］

34 『アティシャ伝』pp.92~93(no.129),『明灯史』p.60.

35 『アティシャ伝』pp.93~94（no.130）,『青冊史』Ca.2a2, 羽田野［1986a:71］

36 奥山［1991:475］は、つぎのように述べる。
アドヴァヤヴァジラのこれまでの軌跡、すなわち学者としての大成→神的存在（devatā）による啓示 → 学問寺からの出奔 → グル探索の旅 → グルとの邂逅 → という筋立ては、その骨子において、ヘーツン・リンチェンナムギェルによって描かれたナーローパの物語と一致しており、行者伝の一つの型を示すものと考えられる。
また奥山［1991: 484fn37］にはつぎのように出る。
『七教勅』はマイトリパ（アドヴァヤヴァジラ）を「後の世に現れた Śā bā ri pa の弟子」と呼び、また dPal gyi ri 山麓に着いた一行に対して、近郷の人々が「Śā bā ri pa は昔のシッダである。今どこで会えようか」と告げる場面もある。両者の特殊な師弟関係が示唆されていると見るべきである。

37 アティシャがヴィクラマシーラ僧院の僧院長（abbot）であったとの説は、Chattopadhyaya［1967:128~134］によって否定されている。

38 藤田［1993: 200~216］

39 『マルパ伝』p.32L14-18.
de nas lam la zhugs te / Mai tri pa gang na bzhugs zhes ’dri zhing byon pas ri me ltar ’bar ba’i dgon pa na bzhugs te lam bgod dka’ mo rang yod pas mi phyin pa grags zer ba ’ga’ byung pas /

40 『マルパ伝』p.66L15-16.
shar dngos grub kyi chu bo gang ga brgal / ri rab tu ’khrogs pa’i dgon pa ru / rje mnga’ bdag Mai tri’i zhal la gtugs /

キーワード
マイトリパ　アティシャ　金剛乗　「ヴァーギーシュヴァラ準則」不作意（Amanasikāra）

Mark Tatz

追記

本稿作成中の筆者は、Mark Tatz 先生の論文二本の存在を加納和雄先生に教えてもらった。ここに記して謝意を表わします。